

レフェリーレポート

～令和5年度 九州ブロックB級審査会への参加を経て～

福岡県ハンドボール協会

久保 尚輝

1. 参加大会

第43回全国クラブハンドボール選手権大会・西地区大会

日程：令和5年6月30日（金）～7月2日（日）

会場：キリンビバレッジ周南総合スポーツセンター

2. 審査会日程

令和5年7月1日（土）8：00～17：30

8：00 受付 8：15 開講式 8：25 筆記試験 9：55 実技試験第一試合トス

3. 審査会への準備

①申し込みまで

福岡県審判長の川端先生からB級審査に関する情報を教えていただき、参加することを決定した。9月の福岡市長杯等で吹笛の機会があったが、自分自身がチームを持っていなかったため、日常でのレフェリングの機会が少ない中での決断であった。審査会へ参加することを決めてから、改めて自分のレフェリングを振り返ると、とても未熟であり、自信がなさそうだとと言われることが多いことに胸を痛めた。しかし、B級に合格した他のレフェリーから、「方向指示の腕は曲げない」「決してボールから目を切らない」ことを助言していただき、まずは、これらが出来ようになろうと決意した。

②各種大会での吹笛

香港代表との練習試合や中学生の試合など、自分が経験したことがないカテゴリーの試合を吹笛する機会を得ることができた。また、上級審判員とペアで試合を担当させていただく機会が多くあり、試合中、また試合後にアドバイスをたくさんいただくことができた。私は、先ほど述べた2点がまだできていないことが多く、特にターンオーバーの場面でよく目を切ってしまう。その際、方向指示や笛の長短が雑になってしまい、それを指摘されることが多かった。

そこから特に意識して行ったことが、「ターンオーバーのときとそうでないときの笛の音色をハッキリと分ける」「まずは確実に方向指示を行う」ことである。ジェスチャーは後からで良いから、まずはどっちのボールなのか分からないとプレーヤーが困ると言われ、選手目線に立ったレフェリングができていないことを痛感した。

また、審査会は一般の大会なので、審査会3ヶ月前に行われた九州クラブ選手権予選の吹笛を希望し、2試合担当した。初めての一般カテゴリーで、予想以上に選手が話しかけてくることに驚いた。また、判定に対し疑問を投げかけることが多くあり、判定基準の根拠を端的に説明することに苦戦した。一般カテゴリーではルールの間隙を狙ったようなプレーがよく見られたため、競技規則を熟知することの大切さを改めて知った。

③筆記試験の対策

筆記試験の対策は、試験の7ヶ月前から本格的に行った。やり方は、①まずは自分で問題を解いてみる ②正誤にかかわらず、問題のキーポイントとなる箇所や用語をチェックする ③誤答だった場合は必ず、判定の根拠について競技規則を基に書き込んでいくという3つのことを行った。今後の吹笛のことを踏まえ、第7条・第8条の問題から勉強を開始した。しかし、第1条の問題などの一部の問題を後回しにした結果、問題をさらっと勉強する程度になってしまった問題もあった。

さらに今回から筆記試験に記述問題が出ることになり、その内容を知ったのが6月10日の中学生クラブカップ大会であった。10箇条について、同大会事前の審判講習会で言われた「リーダーシップ」について記述しようと思い、文章を考えた。それ以外については、順番通り言えるように、練習した。

4. B級審査会当日について

審査会当日は、はじめに筆記試験が行われるため、朝は筆記対策の最終確認を行っていた。特に、第7条・第8条の問題を中心に復習した。記述試験の方は覚えることが出来ていたため、あまり確認は取らず、択一式問題についてのみ確認を行った。実技試験については、筆記試験終了後すぐの試合の担当であったので、事前にペアレフェリーと動きを確認していた。

○反省点

筆記試験では、択一式問題において私が勉強したところがほとんど出題された。記述問題は150字いっぱい記入することができた。しかし、実技試験では、反省点だらけであった。

実技試験の前に、確認事項として審査員の先生から、「審判員の人間性」や「判定は『誰が見ても』ということが大事」、「手順は正しいジェスチャーを用いる」ことなどを重点的に説明していただいた。それにも関わらず、私のレフェリングは全てできていなかった。ベンチやオフィシャルとのコミュニケーションが足りない、視野が狭い、位置取りが悪い、判定が一試合通して同じ基準でない、7mTや罰則に絡む判定の制度が余りにも低いなど、良い点がなく、一つ一つの行動・判定が全て悪かった。試合が始まってから、いつもと自分の様子が違うことを感じており、審査会までに、もっとたくさんのブロック大会を経験して、緊張感のある試合を吹笛できていれば良かったと思う。無駄な動きを無くして、落ち着いて吹笛ができるようにしていきたい。

また、試合後に他の試合を見ていて、競技規則問題集8-71とほとんど同じ状況の試合があった。筆記試験の勉強が、実際のレフェリングにも生きてくることを実感した。ルールを熟知し、瞬時にどのように判定すべきか判断する大切さ、点差が拮抗している状況での判定やRCの判定をする勇気などが必要だと思った。

5. 今後の課題

今回の審査会では、自分のレフェリングの位置取りや判定の根拠が、まだ浅いと痛感した。誰もが納得するように、ペアと協力してなるべく事象が起きたときの近い位置にいることができるようにしたい。また、判定の根拠が「第〇条の〇〇に書いています。」と端的に述べる必要性を感じた。なぜその判定をしたのか、ゆっくり説明する時間がない。また、モダンハンドボールの考え方として、時間を止めないことも踏まえて、コミュニケーションを上手に取る必要がある。どのタイミングで、どのような声かけをしながら、判定の根拠を端的に分かりやすく述べることができるように、ルールに関する勉強や、競技規則問題集の勉強は今後も続けていきたい。

6. 終わりに

令和5年度B級審査会を経て、自分自身の出来ていないことや、他県のレフェリーの良いところを見ることができ、とてもよい経験となった。課題や反省点がとても多く、例え今回の審査会で奇跡的にB級を取得することができたとしても、私は他の誰よりも研鑽をしなければならぬと痛感した。私のレフェリング技術を向上させ、人間性・技術・体力のすべてが高いものになるようにしていきたい。

最後に、私を指導していただいた福岡県ハンドボール協会の方々をはじめ、九州・四国・中国ブロックハンドボール協会の方々や今大会に関わられたすべての方々のおかげで、B級審査会を終えることができたことに感謝して結びとする。